

第31回環境フォーラム
特別企画

講師インタビュー

排ガス規制導入からアジェンダ21

「交渉」の最前線を歩む

フォーラム第2部講師 松下 和夫 氏

京都大学名誉教授 IGESシニアフェロー



できたばかりの
環境庁へ

私は徳島県徳島市に生まれ、中学・高校は千葉で過ごしました。小・中学校の頃から自然に非常に親しむ機会があったと思います。大学は経済学部に進み、当時アメリカから帰ってきたばかりの宇沢弘文先生という大変著名な先生のゼミに入りました。宇沢先生は経済成長に関する非常に優れた論文をたくさん書かれていました。日本の社会は高い経済成長をしているものの環境・公害問題に非常に脅かされていて、人々の生活の質が大変貧しくなっていると考えられたのです。また、当時は助手だった工学部の宇井純さんという方が、公害自主講座という一般の人を対象とした講座を始めました。1972年にストックホルムで開催される国連人間環境会議に向けて日本政府は公害対策の現状をまとめていきましたが、例えば水俣病について患者さんの立場から書いたレポートとはなっていないのです。そこで自主講座の宇井先生を中心として市民の立場から国連人間環境会議のレポートを書こうということになり、国連に提出するレポートを書いた経験があります。



米国留学中 1975年撮影 (左ルームメイト 右松下氏)

排ガス規制の
導入に取り組む

もともととは経済学を勉強していましたが、環境や公害問題、あるいは自然環境に注目しながら過ごしていました。そして大学を出るときに一度は民間企業に就職を決めたんですが環境と経済の問題をしっかりと考えていきたいと思う中で、社会に貢献できる方法として、当時できたばかりの環境庁という役所に採用してもらったというのが経緯です。

環境庁は1971年の7月に入ってきて、私は翌年の4月に入りました。最初の採用生だったんです。環境庁は非常に小さい役所で職員は500人ぐらい、予算も50億ぐらい、霞が関でも一番新参で小さな役所だったんです。

略歴

- 1948 徳島県徳島市で誕生
- 1971 東京大学経済学部経済学科卒業
- 1972 環境庁入庁 法律制定に携わる
- 1976 ジョンスホプキンス大学院 政治経済学科修了(修士)
- 1977 自動車排出ガス規制導入に 携わる
- 1978~1981 OECD環境局に派遣
- 1990~1992 地球サミットに上級計画官として参加
- 1992 環境庁大気規制課長
- 1993 環境庁環境保全対策課長
- 2001 京都大学大学院教授
- 2013 京都大学名誉教授 (公財)地球環境戦略研究機関 シニアフェロー

しかしながら、大変国民の期待が大きくなって、自然環境に関する新しい法律を提案する準備をしていました。今から思うとブラック企業のようなのですが、朝早くから夜遅くまで法律制定作業に従事した経験があります。その後、幸いにしてアメリカの大学院に留学する機会を与えられ、帰ってきてから関わったのが自動車公害問題でした。当時の環境庁長官、後に総理になられる三木武夫さんのもと、日本でもアメリカのマスクリー法に匹敵する排出ガス規制を取り入れるために、窒素酸化物を10分の1に減らそうという大変厳しい規制を提案されたのです。当時の産業界、とりわけ自動車業界からするととても技術的には難しい無理に規制を導入すると

日本の自動車産業あるいは日本産業自体が大変厳しい状態になるということで大きな反対の動きが起こりました。そして国会で非常に厳しい議論が起こり、いろんなやりとりがありました。最終的には当初予定より少し遅れましたが、1978年に規制が導入されました。これは振り返って言えることですが、自動車メーカーも技術者の方々も大変頑張って非常に難しいと言われた排出ガス規制をクリアし、結果的には小型で効率が良い自動車を作るようになったりしました。それが世界のマーケットで日本車が広がることにつながったのです。社会にとって必要な規制を導入することによって、技術が開発され、それが新しい製品を生んで国際競争力を強めた。そういう経験

環境庁から世界へ

その後パリにあるOECD（経済開発協力機構）に派遣され、環境局で3年間仕事をすることがありました。そこでは経済成長と環境政策をどう統合するか、環境への投資をどうするか、国際的な観点からの仕事に関わりました。そして海外経験もあるということから、だんだんと国際的な仕事にも関わるようになり、1990年からジュネーブに置かれた地球サミット（環境と開発に関する国連会議）の準備事務局に向向することになりました。

1992年に開かれる地球サミットは史上最大の国連会議といわれ、世界の100か国以上の首脳が参加した会議でした。当時、地球温暖化、酸性雨、砂漠化、熱帯林の破壊、生物多様性の減少などの問題が注目を集めるようになっていました。世界で干ばつが起ったり、北海でアザラシが死んで海岸で打ち上げられたりだとか、そういった衝撃的な事件が起こったことがきっかけとなって、地球サミットが開かれるようになったんです。その準備過程で最大の課題となったことは先進国と途上国の対立でした。



COP1(ドイツ ベルリン) 1995年撮影
(左 松下氏 右 宮下創平環境庁長官)

地球環境を保護するためには、先進国と途上国が協力する必要があるわけですが、途上国からすると先進国がまず経済発展していわば環境を使い果たして成果を享受している。途上国はまだまだ生活の向上のために経済発展が必要であり、より環境に配慮した発展をするために、先進国から資金的支持が必要だということを主張しました。このように、先進国と途上国が発展の権利あるいは資金の移転を巡って対立しました。

一方でやはり気候変動問題が深刻になってきたので、気候変動に関する国際条約、生物多様性に関する国際条約が同時に交渉されて、地球サミットの直前に採択されました。

地球サミット
交渉の最前線へ

1992年の6月にブラジルのリオで開かれた地球サミットではその二つの条約が署名されるといって成果もあげられました。

事務局は地球サミットの成果となった「環境と開発に関するリオ宣言」という宣言文と「アジェンダ21」（21世紀に向けた地球の行動計画）の草案を作成しました。これらは環境に関して取るべき方針、資金、技術、制度、法律をどうするかということ議論し、数百ページにわたる行動計画のとりまとめにより出来上がっています。そのなかでも私は資金の問題と先進国から途上国への技術移転をどうするかというテーマの担当者として取り組んでおりました。

また資金の問題について、地球サミットが開かれる2か月前、1992年の4月に東京で地球環境賢人会議が開かれました。これは地球サミット事務局長モーリス・ストロングさん、元総理大臣竹下登さん、平岩経団連会長が議長を務められて、アメリカのカーター元大統領、フランスのバール元首相、シンガポールのリー・クアンユー元首相など世界のそうそうたる人々を集めた会議でした。

会議では先進国と途上国がどういう風にすれば資金や技術を共有してより良い地球をつくれるかということとを話し合いました。ここで建設的な成果を出せたことが地球サミットをまとめることにつながったと思います。この会議にも直接的に関わることができませんでした。事務局はいろんな国から専門家が集まって一種の多国籍連合のような形になっており、フラットに意見を交わしながら進めていました。前例がないから新しい発想で取り組めるという意味において大変おもしろかったです。カーター元大統領と直接打ち合わせる機会もありました。心を開いて本音で議論しながら具体的な解決策を導き出すというプロセスに関わったのではないかと思います。



2004年撮影
左 松下氏 中央 プルントラント氏(ノルウェー元首相)

循環型社会へ
現在の研究・活動

現在最大の課題は気候変動や地球温暖化です。今の状態が続くと地球の気温が上昇していつてしまう。2030年30%上昇すると農業への影響や気候災害が起これり経済活動への悪影響も出ます。できるだけ早く化石燃料を脱し、循環型社会への転換が必要なんです。それにはどのような方法があるか、政策はどうするか、どのような技術が必要かを研究する必要があります。そういったことをテーマとして、現在も大学あるいは研究機関で活動を続けています。

環境の世界に入り良かったと思うことは、いろいろな環境の現場や国に行けたこと、あるいはそれぞれがそれぞれの環境にかかわっている方とお会いすることができたことです。



ブータン（首都ティンブー）にて
2018年撮影

第31回 環境フォーラム

グリーン
リカバリー

2022年6月7日（火）

13:30~17:00（予定）

コロナ危機から考える
みらいのカタチ



申込はこちら



公式インスタ



公式フェイスブック